

ルカによる福音書 24：1-12

イースターおめでとうございます。十字架の前に立ち、ただ沈黙するしかなかった私たちに、御言葉はこの朝、イエス様の甦りを告げ知らせてくれています。私たちが今、「主、我らと共にいます」との思いを強くさせられているのはそれゆえのことでもあります。ただ、イエス様の甦りを手放しに喜ぶ私たちとは違って、御言葉は私たちからは少し距離を置いているように思うのです。それは、私たちの気持ちに水を差そうとしてのことではありません。むしろ、その反対です。「主、我らと共にいます」信仰を私たちがより確かなものとしていくには、手放しで喜ぶ前に、私たちにはすべきことがあるからです。それは、事実を事実として伝える、御言葉のそのありのままを受け入れることです。

私たちの受け入れるべきその事実、それは、イエス様の亡骸を納めた墓が空であったということです。そして、次に言われていることは、墓が空であることに誰もが途方に暮れ、恐れおののいたということです。ところが、そこに天使が現れ、恐れおののく人々に対し、イエス様が復活されたと伝えたのです。そして、それを聞いた人々は仲間に甦りの事実を伝えにいったのですが、するとどうでしょう。その受け止め方は真っ二つに分かれることになりました。しかも、あろうことか、弟子たちはわかには信じられなかったということです。このように、主の甦りの朝について御言葉が伝えることは、どれもこれも手放しに喜ぶ私たちの気持ちに水を差すことばかりなのです。

そこで興味深いのは9節以下に記されていることです。「墓から帰って、十一人と他の人皆に一部始終を知らせた。それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして、一緒にいた婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった」とこう記されているのです。このこ

とはつまり、イエス様の復活の理解については、使徒といえども、男たちは物の数にも入っていなかったということです。それは、主イエスの墓を真っ先に詣でたのも婦人たち、具体的な個人名が記されているのも婦人たち、重要な位置にあるのはすべて婦人たちであるからです。ですから、甦りの朝にあった諸々のことについて御言葉が語ることは、男性にはいささか冷たいようにも思うのです。まただからなのでしょう。これはまずいと思ったかどうかは分かりませんが、半信半疑のままペトロは急ぎ墓に向かったのです。ところが、墓が空であったことは確認しつつも、イエス様が確かに甦られたとの思いまでには至らなかったのです。

このように、甦りの朝の主人公は、終始、婦人たちであったと、御言葉は強い調子で語るのですが、ただ、だから男性は肩身の狭い思いをしなければならないわけではありません。クリスマスもそうですし、イースターもそうでなのですが、イエス様の物語の肝心要なところではいつも女性が登場しているのです。それは、いずれが重要かと言うことを言いたいがためではありません。12人をイエス様が弟子として招かれたように、ここでのことは、一つには、役割の違いがあるように思います。そして、もう一つ、それぞれの担った役割には、男女の特性が大きく影響しているということです。それは、女性は気持ちの部分で大切に、男性は事柄の真偽、その事実関係を大切にすることです。ある女性のAI研究者が男女の特性についてこう言っていたのですが、ですから、そう考えるなら、甦りの朝に起こったことは、御言葉がそうした女性の視点を大切にしていたということです。なぜなら、イエス様の仰っていたことを「ああそうか、そういえば、イエス様はそう仰っていたなあ」と素直に受け止めるには、理屈ではなく、その言葉を、その時のイエス様の気持ちを、そのまま丸ごと受け入れる必要があるからで

す。

ですから、イエス様が、もし男性ばかりを重用する方であったなら、イエス様の物語は厚みのないもつつまらない話になっていたのでしょうか。けれども、そうではなかった、ここに御言葉の面白さと、私たちの思い込みを打ち砕く力強さがあるように思います。しかし、じゃあ、気持ちだけでいいのかと言えば、もちろんそうではありません。信仰においては、特に、信仰の肝心要のところでの理解については、気持ちで受け入れることは、マリアがそうであったように重要なことではあるのでしょうか。けれども、何かを人に伝えようとするなら、物事を客観的に見つめる視点が必要です。それゆえ、当時、文字を扱う役割を担ったのが男性であったことをおもいますと、客観的な視点をもってイエス様の物語を見つめていたのは男性であったと言えるのでしょうか。ですから、イエス様の甦りの場面において、すべての福音書が女性の存在感を際立たせていることを考えますと、いわゆる男か女かというところを超えたところで描かれているのがイエス様の甦りの出来事であったということです。つまり、男と女のどちらが上か下かというつまらない話ではなく、そのどちらの視点も必要であったということです。

そこで、これらのことを踏まえながら、もう一度、御言葉に聞いていきたいのですが、では、御言葉が伝えようとしているものの中で一番大事なことは何なのか、それは、イエス様のご遺体が納められた墓が空であったということです。それは、何も無いということがそれだけ衝撃的なことであったからです。そして、この衝撃的な事実を御言葉は、事実を事実としてそのありのままを書き記すのです。ですから、この点から分かることは、御言葉は真実を恐れてはいないということです。そして、それが物事と向き合う上での私たち教会の姿勢でもあります。ただ、墓が空であったと語るその正直さは、事柄の真偽だけを問題にしているではありません。墓が空であったということは、イエス様の復活の出来事自体が言語化することのできないものであったからです。

そして、それは、イエス様の甦りの出来事だけに限ったことではありません。イエス様の誕生の出来事も然り、イエス様のなされた奇蹟も然り、さらには、イエス様の仰ったお言葉も然り、そもそものところで言えば、イエス様ご自身についてもそうです。イエス様に関することも、神様に関することも、人間の理解、経験にすべて落とし込んで語ることなど、人間には到底できることではないからです。では、私たちがそれを自分のものとしていくにはどうすればいいのでしょうか。それは、イエス様の仰ったことに立ち帰って、目の前にある現実を見つめるしかないのですが、それを躊躇わずに行ったのがイエス様に従った女性たちでありました。そして、イエス様が甦られたことをそこで実体験することになったわけですが、それは、女性たちが空っぽになったその心の中にイエス様をお迎えし、イエス様のお言葉で胸が一杯になる経験をした、つまりは、満たされたということでもあります。ですから、この満たされる経験がいかに大事か、それについては私たちの誰もがよく分かっていることでもあるのでしょうか。

ところが、その私たちがこうして信仰をもって歩みながらも満たされない気持ちになることがあるのです。そのため、イエス様のお言葉も、また、信じるその気持ちも、すべてのことが、すかさず、空虚で、中身などまったく感じられなくなってしまうことがあるのです。そして、それを認めることは、私たちにとってはとても恐ろしいことです。なぜなら、このスカスカの状態は自分自身を見失うことでもあるからです。ですから、ペトロが一人で墓に行ったのは、もしかしたら、そんな気持ちになんとか抗おうとしたことだったのででしょうか。けれども、実際に甦りの事実に触れて、この場に登場する女性たちのように、空っぽのその心を満たすことはできなかったのです。そして、御言葉は、それが弟子たちの中で筆頭弟子と言われているペトロであったと私たちに伝えるのですが、このように、墓が空っぽであるという事実は、満たされた者と、満たされずに空虚なままでいた者とを同時に現すものであった

のです。

従って、墓が空であったことを御言葉が強調しているのは、出来事への共感、承認だけを求めていることではありません。墓が空であったとの事実を強調しているのは、この事実こそが私たちの信仰をより強く、確かなものとするからです。そして、それが、イエス様の思いを受け止めた女性たちであったわけですが、ですから、福音書の著者が男性であるとするなら、彼らには、女性に対するそういう意味での尊敬の念があったということです。そして、女性たちをそのように描くのは、空であったというこの事実には、私たちにそうだ、そうだ、その通りだと、そう思わせる作用があるからです。つまり、空であることが、空であればこそ、私たちの思い込みは打ち砕かれ、女性たちと同じように必ず満たされるということです。ですから、イエス様が甦り、私たちと共にあることを信じるということは、事実をねじ曲げ、ないことをあるかのごとく受け入れるような、そういう真実を誤魔化すところから始まったわけではありません。素直に、正直に受け止めるところから始まったものなのであり、先ほど申しました真実を恐れな私たちの態度、姿勢というものもそうです。甦りのイエス様を素直に信じるころからしか始まるものではなく、そして、そのために私たちに求められていることが、ここに登場する女性たちのように繰り返し御言葉の前に立ち帰るということです。なぜなら、そこに私たちが立ち帰るなら、私たちの信仰は満たされ、強められることになるからです。そして、それは、だから私たちが鋼のような強さを持つことができるというではありません。

強さとは、ちょうど、ここに登場する女性たちがそうであるように、だらしのない使徒たちを力でねじ伏せるような、そういう強さではありません。勝ったか負けたかでしか考えられないような、そういう対立型のものの考え方を御言葉は求めてはいないからです。ただし、弟子たちと婦人たちとの間に大きな違いがあるように、そこには明らかな違いがあるのです。そして、その違いとは、イエス様のお言葉に素直に聞

いていけるか行けないかの違いであり、このように御言葉が私たちに求める強さとはつまり、正直さであり、柔軟さでもあるのです。従って、私たち信仰者が、一つの出来事が収まりを見せるまで忍耐強く待ち望むことができるのは、そのような強さ、しなやかさを持っているからでもあります。それゆえ、この強さとしなやかさは、あらゆる局面において生かされることとなります。それは、婦人たちが弟子たちとイエス様を繋ぐことで、彼らもまたこの強さ、しなやかさを持つに至ったように、強さとはイエス様との関係性をより強固なものにするからです。

そして、それは、イエス様との関係性のみが強くされるということではありません。イエス様とも、また、神様とも、さらには、人とも、世界とも、ありとあらゆるものとも、イエス様を素直に信じるその気持ちすべてのもものと私たちとを繋ぐことになるのです。まただから、様々なものとの絆は強められ、深まることにもなる、ですから、御言葉が私たちに強くあること、しなやかであることを求めるのは、そういう意味で、イエス様の甦りの出来事が、世界と人とを神様につなぐ出来事であったからです。それゆえ、イエス様を慕う女性たちと弟子たちの歩みが、この墓が空であったところから始まっていったように、この「何もない」ということを私たちが互いに受け入れるなら、そこから言葉では言い表すことのできない、イエス様との豊かな交わりが始まっていくことになるのです。

ですから、ここでの弟子たち、女性たちがそうであるように、私たちのそうした歩みは、よーいどん、といった塩梅に、一斉にスタートを切るものではありません。問われていることは、誰が早くて誰が遅いかということではないからです。イエス様の甦りの出来事は、彼らが一塊となって歩み続けた結果として語られているのであり、それゆえ、全員の足並みが初めから揃う必要はありません。イエス様の墓が空であったのと同じように、初めはつかみ所のないものにしか見えないのです。まただから、それに我慢できないときなどには、この空っぽで中身がないと感ぜられるものの中

に、自分の理想や願望を詰め込みたくなったりもするのです。そして、それがここではイエス様の、一人欠けることになった十一人の弟子たちであったように思います。けれども、彼らはそこに何を詰め込んだらいいのか分からなかった、ペトロの後ろ姿を見たなら、きっとそんな気持ちにさせられたのでしょうか、ところが、弟子とは名ばかりのこのイエス様の弟子集団に現れたのが甦りのイエス様であったのです。ですから、墓が空であったという事実は、師亡き後の弟子集団の空虚さを現すと同時に、その可能性の大きさを表しているとも言えるでしょう。なぜなら、この名ばかりの弟子集団が、キリストを頭とする共同体、交わりへと、実体を伴い成長することになったからです。

そして、それは、彼らがイエス様と自分たちとの間に、自分たちの力では埋めがたいほどの隙間、空洞があることを認めたからです。それゆえ、甦りのイエス様と出会った彼らの成長ぶりは、その隙間を、その空洞を彼らが自分色に染め上げたことがその理由ではありません。イエス様の甦りが事実であることを知った女性たちがそうであるように、隙間を埋めるものはイエス様以外他には何もないのです。そして、彼らにそれが許されたのは、イエス様の甦りを信じる交わりの中に彼らが置かれていたからです。ですから、甦りのイエス様と共に歩む私たちに求められていることは、その余白を忌み嫌い、また蔑み、それがあたかも価値のないもののように思い込むことではありません。そうではなくて、余白こそが私たちの信仰を強く、しなやかにするのです。なぜなら、余白があるからこそ、イエス様が私たちの中で、私たちのこの交わりの中で、生き生きと働くことになるからです。ですから、イエス様の甦りを共々に祝うために必要なことは、その甦りの原点でもあるその内側にある余白を見つめること、墓が空であることを見つめ、この何もないということの中に、はっきりしたものを感じ取ることだと思ふのです。

私たちがもし今この時、あれもない、これもない、だからダメなんだとそう思うようなことがあったなら、婦人たちがそうで

あったように、その都度、イエス様のお言葉を思い出し、その御言葉に立ち帰って、祈りの内に何も無いところにイエス様をお迎えしたいと思うのです。それは、甦りのイエス様が私たちに納得を与えるようとして、墓の中から出たり入ったりするお方ではないからです。生きてなお、私たちと共にあり、御国までの歩みを支え導いてくださっているお方、それが私たちのイエス様なのです。それゆえ、墓が空であったということは、私たちの行き先がイエス様が葬られた墓穴ではなく、天の御国であるということをはっきり伝えてくれているわけですが、ただ、イエス様の甦りの事実を受け入れ、御心を理解することができたとしても、それでも、空しさに押しつぶされ、祈るその言葉さえ出てこないこともあるのでしょう。では、その時、私たちはどうすればいいのでしょうか。

最後に、そのとき、どうすればいいかをお伝えしますと、それは、主の祈りを祈ることです。繰り返し、繰り返し、何度も、主の祈りを祈るのです。そして、祈りながら、御言葉を通してこうして聞いているイエス様の姿を思い出そうとすることです。なぜなら、イエス様が甦られ、この私と、この私たちと共にいてくださる、主の祈りを祈りつつ、知らされることはこのことだからです。まただから、私たちは、その信仰ゆえに、これでいい、と思える、そういうしなやかな強さを身につけることになるのです。ですから、小ささや愚かさを恥じる必要はありません。小ささや愚かさの言い訳をする前に、私たちが見つめるべきは、空しく、卑しいこの私とイエス様は共にてくださっているということなのです。主の祈りを祈ることで、私たちはこの事実に触れ、神様に赦されている自分自身であることを知るのです。神様の愛、神様と私たちとの豊かな交わりとはそのような形で私たちに与えられているのであり、それゆえ、私たちの信仰とは、そのことを心から喜ぶことでもあるのです。祈りましょう。